



仙台の織物業

最近、若い世代を中心に、和服を着る人の数が増えています。とくに正月は、和服姿の人を見かけることが多い時期になります。

仙台には、仙台平という高品質な絹織物があります。生産者・生産量ともに少なく、現在では仙台の特産品として認識されることは、残念ながら少ないと言わざるを得ません。

しかし、明治時代の仙台では、仙台平を筆頭に、たくさん織物を作り出され、仙台を代表する工業の分野となっていたのです。明治時代半ばには、織物の生産額は、仙台の工業生産全体の約二割を占め、食品工業に次ぐ大きな割合を占めていました。また、大きな製糸工場もあり、繊維産業は仙台における工業の中核的な位置付けになっていたのです。

織物の種類としては、仙台平、八ッ橋織、羽二重といった絹織物のほか、綿織物も多数生産されました。絹織物は多くが県外に移出されていましたが、綿織物は県外に移出されるときも、地元需要を満たす部分も結構な量がありました。

常盤紺型

そうした仙台の綿織物を特徴付けるものに、「常盤紺型」という技法があります。当時、綿織物もち米を材料にした糊を使う型染めで布地に模様を付けていました。それに対し

て常盤紺型は純白土とわらび粉を使った糊を用いたのですが、これによって、従来の染色技法に比べて、鮮やかな色彩で、かつ耐久性のある色付けができるようになったのです。

こうした常盤紺型は、庶民の衣服の生地として大きな支持を集め、女性の衣服だけでなく、耐久性があることから農家の労働着や学童用としても重宝されました。

この常盤紺型は、江戸時代後期に出羽国横手（秋田県横手市）の最上忠右衛門が考案し、その子孫が明治二十三（一八九〇）年に名取郡長町郡山（太白区郡山）に工場を設立したことから、製法が仙台に伝わったのです。

優れた染色方法であった常盤紺型は評判を呼び、技術改良を重ねながら、最上家の工場以外でもその生産が行われるようになりました。その結果、常盤紺型によって染められた綿織物は、明治時代後期には仙台を代表する産物となったのです。

工場主から青年実業家へ

常盤紺型の主力工場の一つに、青山惣吉が仙台南染師町に設立した青山染工場があります。惣吉は、祖父の代から続く染物屋に明治十六年に誕生しました。惣吉が幼少の頃、生家は明治維新後の変化に対応できず、貧窮を極めていました。惣吉は家業を立て直すべく、東京の染織学校で技法を習得し、帰仙後の明治三十五年に家業を継承しました。

常盤紺型にも着目した惣吉は、その技法の導入と改良に努め、南染師町に工場を設けての大量生産と、販路拡大を図りました。早くも明治四十年前後には北関東以北一円に販路が広がり、とくに北海道で鉄道工事に携わる人夫や港での荷受人夫用の半纏を大量受注することに成功しました。こうした人夫は、複数の会社から作業現場へ派遣されていました。惣吉はユニフォームのような半纏を作り、労務者の把握に貢献したと言われています。

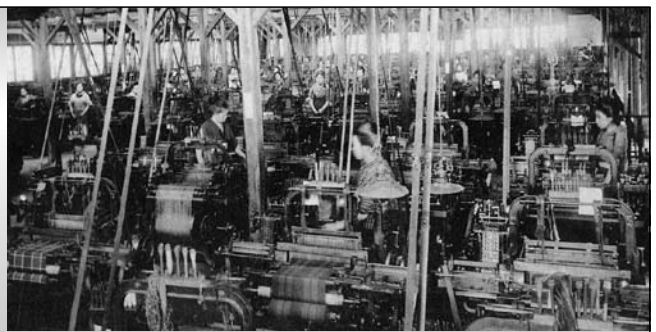
こうして家業を東北随一の規模に発展させた惣吉は、織物業にとどまらず、網走地方での開拓事業、東京に建てたビルの経営に成功し、仙台庶民金庫を創設して金融業にも進出し、全国的に知られる実業家へと躍進します。青年実業家として地位を固めた惣吉は、仙台商工会議所副会頭に推され、また市会議員となって政界にも進出しました。

しかし、昭和初期の経済恐慌が経営拡大を続けた惣吉に大きなダメージを与えました。とくに金融業の業績が好転しないなか、昭和七年（一九三二）年、惣吉は失意の死を遂げました。まだ五十歳の若さでした。

この経済恐慌は、アメリカの株価暴落に端を発する世界的なものでした。この時期、仙台の経済界も世界経済に組み込まれ、惣吉もその流れに押し流されてしまったのです。



常盤紺型で染色された反物(写真:東北歴史博物館提供)



仙台染織製綿株式会社工場 明治45年に設立された綿織物の工場。従業員が200人を超す仙台でも屈指の大きな工場(大正14年「仙台市写真帖」より)

仙台市史

好評発売中

通史編6 近代 1

明治時代の仙台 近代化とそのくらし

◆A5判 520頁 オールカラー ◆定価3000円(本体2858円)

お求め先 県内主要書店・仙台市博物館/雫宮城県教科書供給所 TEL.022-235-7181 FAX.022-235-7183  
お問い合わせ先 仙台市博物館市史編さん室 〒980-0862 仙台市青葉区川内 26 番地 TEL.022-225-3074